元は明治の両国橋

# 30 南高橋

みなみたかばし

花火が消ゆる。
薄紫の孔雀玉……紅くとろけてちりかかる。
Toron …… Tonton …… Toron …… Tonton
色とにほひがちりかかる。
両国橋の水と空とにちりかかる。

北原白秋の詩集「雪と花火」の一節である。このとき隅田川の花火に浮き立っては消えた両国橋は、３径間の鉄のトラス橋だった。

この橋が出来た明治37年（1904）というと、２月に日露戦争勃発、旅順港閉塞作戦や203高地の攻防もこの年の出来事であるから、随分と昔のことである。橋体がどこで製作されたのか調べてみたが、わからない。支間中央部の箱断面垂直材には、イギリスの圧延材であることを示す陽刻があるが、下記するようにこの垂直材は創架当時のものと異なる。同じ隅田川でも、吾妻橋（明治20年）、厩橋（同26年）、永代橋（同30年）など、いずれも国産のトラス橋で、製作者もはっきりしているが、両国橋だけは出所を示す資料が見当らない。どうしたわけであろうか。

明治の両国橋は、関東大震災で木製の床を焼失したりして、被害を受けながらも生き残った。その後の帝都復興計画で、両国橋が現在架かっている鋼桁橋に代わったのは、昭和７年（1932）のことである。

お役御免になった旧両国橋３連のうち、中央径間を持ってきて亀島川の河口に架けたのが、南高橋である。中央区の橋梁台帳をみると、「旧両国橋中央径間鋼構を一部補強補足し使用するものとする」とある。旧両国橋の写真と比較してみると、幅員が狭くなっていること、支間中央部の垂直材８本がラチス編みの開断面から板張りの箱断面に変わっていること、などがわかる。

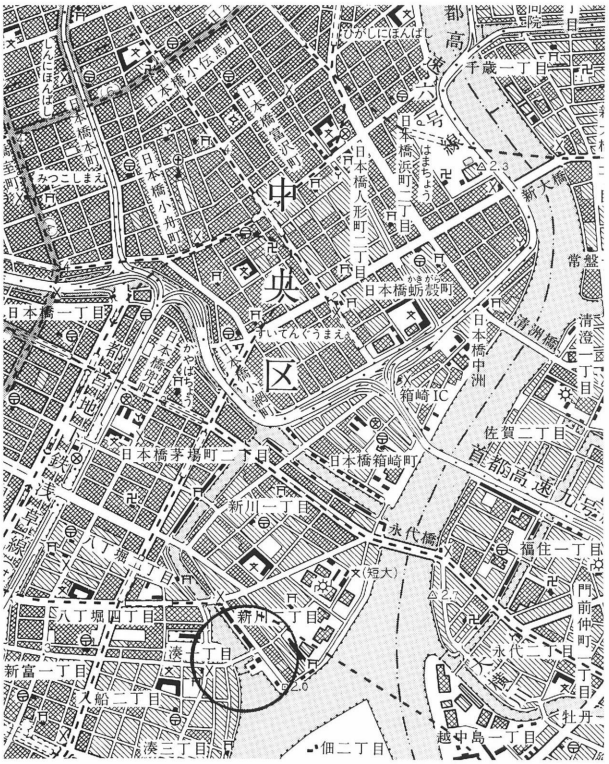
東京大空襲で亀島川左岸は焼け野ヶ原になったが、この橋は無傷だった。そういえば、大震災で４万人の犠牲者を出した旧陸軍被服廠（ひふくしょう）跡は、この橋の昔の所在地からほど遠からぬところであった。悲惨な歴史を眺めてきた橋でもある。

南高橋は、平成元年に、1.4億円をかけて美化工事が行なわれた。橋体はシルバーペイントが塗られ、歩道の舗装には磁器質タイルが張られ、橋詰も綺麗になった。いぶし銀調の橋門装飾は旧両国橋のものを忠実に復元している。ただ、建物を模した端柱頭装飾は、被服廠跡の東京都復興記念館１階に陳列してある実物と比べると、大分小さくなっている。

〔ＮＴ〕

竣工年月：昭和７年（1932）３月
所在地：東京都中央区
河川名：亀島川
橋長・幅員：63.10ｍ×11.00ｍ（車道６ｍ＋歩道２×2.5ｍ）
径間数・支間長：１×60.35ｍ
形　式：下路プラットトラス（ピン結合）

〈1994年１月，撮影・共に成瀬輝男〉


中央区
日本橋一丁目
日本橋人形町二丁目
日本橋蛎殻町
日本橋中洲
箱崎IC
日本橋箱崎町
日本橋茅場町二丁目
新川一丁目
永代橋
八丁堀四丁目
新富一丁目
湊三丁目
佃二丁目
越中島一丁目
千歳一丁目
新大橋
常盤
清澄一丁目
佐賀二丁目
首都高速九号
福住一丁目
門前仲町
永代二丁目
扇橋
丹
日本橋浜町三丁目
日本橋小舟町
日本橋本町
日本橋伝馬町
日本橋富沢町
日本橋茅場町
日本橋箱崎町
日本橋蛎殻町
日本橋中洲
日本橋人形町二丁目